

アイヌ民族の表象に関する考察

—博物館展示を事例に—

本 多 俊 和¹⁾・葉 月 浩 林²⁾

Report on representation of the Ainu in public and private museums

STEWART Henry & Korin HAZUKI

ABSTRACT

The results of a study of 21 public and private museums in Japan show that displays of the Ainu are mostly restricted to the pre-modern (Edo Era) and early modern (Meiji Era) periods, with almost no representation of their contemporary situation. Even museums administrated by the Ainu themselves showed a strong tendency to emphasise the “traditional” aspects of Ainu culture and society, with scant or no representation of contemporary conditions and legal/social situation. According to our analysis, this mode of representation is a major factor in the imagery of the Ainu as a “past” society, or as a society no longer in existence. We propose that more representation of contemporary aspects is vital to a correct understanding of the Ainu today.

要 旨

本論では、国内21ヶ所の博物館におけるアイヌ民族に関する博物館展示を調査して、その内容を把握するとともに、現場にたずさわる関係者をインタビューして、問題点とその背景を明らかにする研究である。アイヌ民族に関して「伝統」を強調する展示により、アイヌ民族を過去に閉じこめ、永遠の未開性を演じさせる仕掛けになっている、あるいはアイヌ民族は現在いるかどうかということを曖昧にしていることを指摘する。展示を改新する方法として、博物館関係者の横のつながりとしてのネットワークと、当事者であるアイヌと博物館関係者のコミュニケーションの場を設けることを提案する。

I. 前 言

博物館における民族に関する展示、とりわけ少数・先住民族に関する展示は、時代とともに大きく変貌している。1960年代では、主流社会の意向によって展示方法と内容が一方的に決まっていた。それまでは、少数・先住民族の展示はもっぱら「文明」を引き立てる対象として、「未開」を演じる役割を負わせられていた[スチュアート編2003]。しかし、1970年代に入り、少数・先住民族の展示には、厳しいまなざしが向けられるようになり、展示の方法と内容が改新されつつある。

それは、アメリカの公民権運動などによって民族の尊厳と矜持を取りもどす国際的な世論に触発された少

数・先住民族が展示方法と内容に対してものを言うようになったからである。とくにやり玉に挙げられたのは、昔の様子だけを強調する展示であった。「伝統」と称せられる昔の様子を展示することによって、その民族を過去に閉じこめ、永遠の未開性を演じさせる仕掛けになっていた。また、昔の様子だけにこだわる展示では、その民族は現在いるかどうかということを曖昧にしている。実際、「伝統」を強調する展示では、その民族が直面している差別や同化政策によるアイデンティティ喪失、文化と社会的な崩壊という現実を隠蔽する効果もある。

この小論では、その視点から、国内ではアイヌ民族に関する博物館展示を調査して、その内容を把握するとともに、現場にたずさわる関係者をインタビューして、問題点とその背景を明らかにする研究である。

¹⁾ スチュアートヘンリ放送大学教授(「人間の探究」専攻)

²⁾ 東京外国大学博士前期課程



①近世のヌササン（祭壇）（アイヌ民族博物館）

その上で、アイヌ民族に関する展示を改新する方法として、博物館関係者の横のつながりとしてのネットワークと、当事者であるアイヌと博物館関係者のコミュニケーションの場を設けることを提案する。

本研究は、国内調査は平成16および平成17年度の放送大学特別研究費、ヨーロッパと北アメリカの調査は科学研究補助金（「カナダにおける先住民のメディアの活用とその社会・文化的影響」平成14～17年度科学研究費補助金（A）（1））の援助を得て実施されたものである。

Ⅱ. アイヌ民族の先住性について

アイヌ民族は先住民族であると前提していることがこの論文の基礎となす前提である。読者はこの前提は自明であると考え得るであろうが、日本政府はアイヌ民族を先住民族と認めていないし、国際社会では先住民族には先住権があるとされているが、アイヌ民族は先住権¹⁾を享受できる状況にないのが現状である、ここではアイヌ民族を先住民族とする根拠を簡潔に述べる。

日本における先住民族であるアイヌの歴史はカナダの先住民とは異なっているが、巨視的にみれば植民地的な状況におかれてきたアイヌ民族の16世紀以降の歴史は、植民地の歴史であるといえる〔スチュアート1991〕。1593（文禄2）年に豊臣秀吉が蛸崎慶廣（後に松前と改姓）に朱印状を与え、蝦夷島の支配権を公認し、1604（慶長9）年に家康が松前慶廣に発給した黒印状は、松前藩に蝦夷（アイヌ）に対する交易独占権を認めた。田村貞雄の「北海道内国植民地論」〔スチュアート、上野2001：65〕で北海道の植民地的な要素を北米におけるイギリスなどの植民地的状況と比較すれば、北海道におけるアイヌ民族が植民地的な状況におかれていたことは明らかである。そのため、北海道とそこに先住してきたアイヌ民族のおかれていた状況は西欧列強の植民地での状況と区別する必要がないとする。

Ⅲ. 先住民族の展示をめぐる事件

博物館で展示されている民族資料は、第一に植民地的な状況、すなわち支配者が不均衡な力関係において現地で収集・略奪してものであるという問題が1970年代以降、論争の的となっている。第二に、宗主国本国で、あるいは植民地で支配者の造った博物館で、どの資料をどのように展示するのかは、ドミナント社会の独断で決めていたことである。展示される資料には、アメリカのホビ民族のカチナ〔スチュアート2006〕のように、その民族にとっては神聖なものもあり、本来、特定の者以外が見たり扱ったりしてはならないという信仰にかかわる資料、あるいは遺骨や人間の剥製〔ハーバー2001、Schrire 1996〕を展示するという事例は枚挙にいとまがないほど多い〔Jones 1993〕。

先住民運動が1970～1980年代に高まっていく国際的な潮流において、博物館や美術館での民族資料の展示に対する論争、ときには物理的な衝突が起きようになった。民族資料の展示の仕方にかかわる初期の「事件」として、ニューヨークの近代美術館（MoMA）での「20世紀美術におけるプリミティビズム」展（*Primitivism in 20th Century Art: Affinity of the Tribal and the Modern*、1984年）をきっかけに議論に火がついた。プリミティビズムと「未開」に関する芸術論〔吉田1998：522～526；Hiller 1991〕はさておき、この展示会をめぐるもう一つの問題は、展示される民族資料はどのような状況で収集されたかということへの認識、そして展示する資料は主催者側によって一方的に決まったことにある。

近代美術館の事件につづいて、1985年にロンドン人類博物館（当時）で開かれた「アマゾンの隠れた人びと」（*Hidden Peoples of the Amazon*）展では、先住民、とくにブラジルのインディオに対する同化政策と、アマゾン川流域で進められている開発による被害に関する情報はなく、「伝統」的な様子しか展示されていないことを抗議したインディオが博物館の前でピケを張った。

日本ではほとんど話題に上らなかったが、欧米で博物館の展示に関して大きな波紋を投げかけたのは、カナダのアルバータ州カルガリーにあるグレンボー（Glenbow）博物館の「精霊は歌う」（*The Spirit Sings*、1988）展であった。この展示は、1988年の冬オリンピック記念行事として企画されていたが、展示の対象と予定されたクリー民族の一集団であるルビコン・バンド（Lubicon Band）の居住地で油田開発を進めているシェル石油、パルプ原材料のための森林伐採を進めようとしていた大昭和製紙が展示会を後援する団体になっていたことと、先住権をめぐるカナダ政府とルビコン・バンドの交渉が暗礁に乗り上げていたことによって醸しだされていた政治的、経済的な課題を背景に、展示企画が冒頭から難航した。さらに、展示内容は17～18世紀の資料を中心とした展示であり、

1980年代当時、ルビコン・バンドが直面している問題は等閑視されていたことに対して、クリーの代表が準備段階から不満を表明していた [Goddard 1991: 141~158]。ルビコン・バンドの抗議が世界の耳目を集め、アメリカやドイツの博物館から資料提供を受けることを前提とする「精霊は歌う」展に対して、資料提供予定の博物館が提供を見合わせるとともに、カナダ民族学会などが展示そのもののボイコットを呼びかけるまで事態がこじれた。この事件によって、民族資料を展示する博物館における問題点が広く注目を集めることになった。

カナダ・トロント市のロイヤル・オンタリオ博物館 (Royal Ontario Museum) で開催された「アフリカの奥地へ」(Into the Heart of Africa, 1989) 展は政治問題にまでなった。主な批判は、アフリカ人(「黒人」)文化にしかるべき敬意がかけていること、人種主義的な含みがあるということであり、あげく、博物館の前での抗議行動が暴動化したため、予定されていた移動展覧会を中止せざるを得ない結果となった [Jones 1993: 210~211]。

その後も、スペイン・バニョレスのダルデール自然史博物館でブッシュマンの剥製を展示していたことが明るみに出て [1992年、スチュアート 2003: 245~246]、南アフリカ国立博物館・アートギャラリーの「Miscast: Negotiating Khoisan History and Material Culture」[Lane 1996; Skotnes (ed.) 1996] 展によって、「他者」の展示に関する議論がますます先鋭化していった。どの展示でも、誰が、どのような資料をどのように展示するのかに関するものに議論が集中し、現在もそれらの問題は博物館関係者を悩ませている [クリフォード 2002; ホーン 1990; 吉田 1996, 1998; Ames 1992; Carbonell 2004; Karp ほか 1991; Kingston 2003; Simpson 1996 など]。

国内では、国立民族学博物館におけるアイヌ民族の展示をめぐる論争が起きた [Asquith 2000; Niessen 1994, 1997; Ohtsuka 1996; Shimizu 1996]。論争の発端は、カナダの人類学者ニッセンが、グレンボー博物館事件の視点から、国立民族学博物館のアイヌ民族の

展示では「伝統」の様子しかないことを批判したのである。その批判に対して、その展示はアイヌの長老である故萱野茂氏の指導の下で企画・作成されたと清水と大塚が反論し、外国(カナダ)の事情を基準に日本を批判することは西欧中心の「人類学的植民地主義」である [吉田 1998: 519] とニッセンの批判を退けた。

以上の問題とかかわっているもう一つの課題は、博物館で保管されている民族資料の対応に関する議論である。上述したように、博物館で保管されている先住民族の資料の多くは、植民地的な状況、すなわち不均等な力関係において「収集」された文化遺産である。祭祀器や人骨を含めて、博物館に収蔵されている文化遺産の返還問題 (repatriation) がオーストラリア、カナダ、そしてアメリカなどで起きている [Grad 2003]。比較的円滑に返還された事例として、先述したアメリカ南西部のホピ・インディアンのカチナがある。祖霊を象ったカチナがアメリカ国立博物館(スミソニアン博物館)に収蔵されていたが、博物館当局とホピとの話し合いで、19世紀後半~20世紀前半に収集された多くのカチナがホピに返還されている。しかし、該当の民族の承諾もなく多くの民族文化財が博物館の収蔵庫に保管されており、当事者がそれを見ることすら容易ではない状況が現在もつづいている。

過去において「標本」として人類学者が収集した先住民の人骨、あるいは工事などに伴う考古学の発掘調査で出土する人骨の返還も重大な課題である。博物館や大学で収蔵されている人骨 [Leonard, Feezor-Stewart 1991]、展示されている人骨や人体 [ハーバー 2001, Skotnes 1996] が先住民の感情を逆撫でしている。

Ⅳ. 博物館とは

以上の国内外の状況をふまえて、アイヌ民族資料を対象とした国内の博物館展示の現状を調査し分析することにした。調査に際して、博物館という施設の性格を次のように位置づけた。

博物館は教育機関であるが、本論では、教育機関としての性格のほかに、来館者には、民族に対するイメージを植えつけるメディア媒体としての性格を博物館が持ち合わせていることを前提として論を進める。教育機関としての博物館、とりわけ国公立の博物館には権威があり、展示は事実を提示していると信頼されている。そのため、博物館が発信する情報や展示される対象は正しく伝えられているという信頼があるので、展示を観た来館者は、展示で表象されている民族は忠実に表わされていると理解するのであろう。つまり、教育機関でもある博物館に寄せられる信頼によって、展示される民族のイメージがそのまま定着するという仮定で調査を実施した。

この視点から、国内で調査した21の博物館(資料1)において、アイヌ民族はどのように表象されているのかを観察した結果、いわゆる伝統的な様子を展示する



②萱野氏によるコタン(村落)の復元
(国立民族学博物館)



③伝統的な生業用具 (北海道開拓記念館)

施設が圧倒的に多く、ごく一部の例外を除いて、アイヌ民族の「現在」を展示する施設はなかった。公立博物館を中心に、北海道16ヶ所と本州5ヶ所の博物館などの展示施設では、近世（江戸期）後半から近代（明治期）前半にかけてのアイヌ民族に関する展示は「伝統」的な様子にとどまり、近代後半から現代までの様子に関する情報がなく、アイヌ民族のおかれている現状に関する情報はほぼ皆無であることが明らかになった。

調査でこの現象を問題とする理由は、「伝統」に限られた展示を観て、アイヌ民族をめぐる現状に関する知識が少ない来館者は、現在でもアイヌ民族の人びとは昔と変わらない生活をしていると解釈するか、あるいはアイヌ民族は現在はいないと誤解する可能性があるとする問題意識にある。

アイヌ民族の「現在」について一まとめにすること自体が難しい。商売に成功しているアイヌ、地域社会に貢献しているアイヌ、大学院へ進学し研究者として活動しているアイヌなどさまざまな人びとがいる。一方、学校で「アイヌの子だ」と蔑まれ、就職や結婚に際して差別を受け、地元で自らアイヌであることを隠さなければならないという社会的な状況などの深刻な問題をアイヌ民族はかかえている。詳しくは、鈴木[1990]、東京都企画審議室[1989]、北海道民生部[1986]、そしてインターネット（http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/jinshu/99/betu_2.html; <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ks/sum/soumuka/ainu/jittai.htm>など）を参照されたい。

V. 調査成果の概略

北海道の博物館と本州の博物館の展示内容には著しく異なる様子はなかった。数万人のアイヌが住む北海道では、その現状と実態に関する要素が取り入れられている展示があると予想していたが、北海道でも本州でも、展示はいわゆる伝統を全面に出した展示になっており、その予想と反した結果になった。そして、後述するように、博物館がかかえている課題は本州と北海道では大同小異であることもわかった。

以降、博物館におけるアイヌ民族の展示を対象とした調査の成果をいくつかの課題に分類してその概略を述べる。なお、この調査は追及や批判ではなく、展示の現状を把握し対応策を考えるための資料を提供することを目的としているので、博物館名やインタビューに応じてくれた学芸員の名前を原則として明示しないが、積極的な取り組みをしている博物館の施設名を明記する。以下は、アイヌ民族の「現在」の展示に関する記述である。

1. 「現在」を展示しない背景

調査したほぼ全博物館に共通しているのは、アイヌ民族の「現在」を展示したい、あるいは将来に展示する企画を考えているが、さまざまな理由によって実現できないでいる事情があることである。実現できない理由として、次の点が挙げられた。

1. 該当の博物館が設立された当時、「現在」を展示する発想はなかった。
2. アイヌ自身、現在の展示を必ずしも望んでいない。その背景には、和人との違いを強調することによって民族の独自性を浮き彫りにする意図がある（これについて考察で詳しく論じる）。そのために、伝統的な展示のみを望むアイヌがいるということも事実である。
3. 「現在」を展示する意向はあるが、展示スペースと予算の制約や、展示を企画し実現する人員的な余裕がない。
4. 来館者がいわゆる伝統的な様子を期待しているので、「現在」を展示しても集客の目玉にならない。これは上記の2.との相乗効果により、「現在」を展示する博物館関係者の意欲を殺がせているようである。
5. 「現在」をどのように展示するか、何を展示するかという未解決な問題がある。特別展でアイヌ民具製作などの技術保持者の活動をアイヌの「現在」として、最近の写真で展示する企画があったが、個人が特定できる、あるいはプライバシーにかかわるの



④現代作品の展示 (平取町立二風谷アイヌ文化博物館)

で、積極的に推進できない。この問題の背景には、「アイヌ」として生きるのではなく、「日本人」として生きようとする思惑があるので、そのことがもの中心の展示に偏る原因の一つにもなっている。いまだに「アイヌ」に対する差別があるので、アイヌであることを知られたくない状況もある。

6. 「現在」を展示する前例がなく、どのような展示をするのがよいのか戸惑っている。実際、現代を生きるアイヌの姿は多様であるので、そのことがわかるような展示にする課題がある。また、この問題に関連して、アイヌ自身の間には統一された見解がないので、博物館として何をどのように展示すればよいか遠慮せざるを得ない。
7. アイヌの人びとは何をもって自分のエスニシティを表象するかという意志表示をしていない。
8. 「現在」を展示することは、本来、北海道ウタリ協会の役割であるのに、協会が積極的に取りくんでいないので、個別の博物館が独自に展示を企画することが困難である。
9. ○△町の工場で働いているアイヌやその家の中を展示することの意味がはたしてあるかどうか、疑問が残る。
10. 学芸員同士の縦割り組織により、アイヌ民族展示

をめぐる意見調整ができないこともある

11. 先住民運動について、札幌にある北海道ウタリ協会の資料室や、大阪人権博物館には多少の情報——運動のポスターや国連における当時のウタリ協会会長の野村義一の演説写真——があるものの、アイヌの人びとがおかれている状況に関する情報がきわめて少なく、様子を紹介するビデオにアイヌが映っていても、実際にそこまで見てくれる来館者の数はあまり多くない。

2. 「現在」への対応の工夫

1. アイヌ民族の現状を展示することは現時点では困難だが、学芸員が解説員に講義を行なうことにより知識を身につけ、来館者の質問に答えられる工夫をしている。
2. 展示よりも手工芸や伝統的な踊りや歌の演示に重きをおき、アイヌの伝統芸能の披露とともに、現状について演示に先立って口頭で伝える。その中でアイヌについて歴史的なことよりも、アイヌであるスタッフ自身の経験や祖先から伝わる体験を語っている（アイヌ民族博物館）。
3. パンフレットやアイヌ民族に焦点を当てた冊子などを用意する。



⑤最近のアイヌ民族活動の様子に関する資料
(北海道ウタリ協会資料館)



⑥アイヌの伝統的なコタン（村落）の再現
(アイヌ民族博物館)



⑦チセの中での伝統的な踊り
(アイヌ民族博物館)



⑧アイヌ文化情報センター
(帯広100年記念館)



⑨戦後のアイヌ文化継承者に関する説明
(大阪人権博物館)



⑩チセの中で展示されている現代感覚の服飾
(大阪人権博物館)



⑪北方諸民族の展示
(北海道立北方民族博物館)



⑫北方諸民族展示での伝統的な男性アイヌ服
(北海道立北方民族博物館)

4. 館内にアイヌ文化情報センターを開設し、市民が自分たちで学べる場を提供している。アイヌの人もアイヌのことを学べる場でもある。展示では伝えきれないことをここで補うという意味合いもある。交代制で職員がセンターを管理している。入ってきやすい雰囲気作りのためにアイヌの音楽や、ビデオなども流している（帯広100年記念館）。
5. 常設展では、近・現代に生きたアイヌ言語・文化の継承者や文学者を紹介し、現代に生きている関連のある人による、継承者などについてのコメントを添える。さらに、展示内容を決める際には選定委員会を設置し、若いアイヌと一緒に議論することにより、学芸員が想定していた展示内容とは、かなり違う内容になることもある（大阪人権博物館）。
6. 実際の展示の一例としてチセ（アイヌ民族の伝統的な家屋）の展示を挙げると、チセを展示することは、伝統生活を見せるという意図ではなく、現代とつながっているという意図があるので、チセの中には現代に生きるアイヌの制作・製作するものを展示する。伝統的な製法にこだわらないオリジナルな作品が多く、現代感覚で作られたアイヌの男女の衣装などがある（大阪人権博物館）。
7. 展示パネルのコメントには、現在生きているアイ

- ヌの主張を意識的に取り入れる。結城幸司氏は和人（日本人）と姿、格好は同じでも、アイヌだというアイデンティティーを持っているコメントしている。しかし、アイヌの現代についての展示は基本的に文字のみで、ヴィジュアルとして何かがあるわけではないので、よく見ないと伝わらないという難点がある。解説用ビデオで現代のアイヌの主張である民族文化の継承と権利回復と民族意識の継承、差別撤廃を説明しているが、観てくれる来館者は多くはないという（大阪人権博物館）。
8. 企画展で、作品や工芸品をつくったそれぞれの人の語りを、その人の顔写真と一緒に展示した（北海道立北方民族博物館）。
 9. 北方の中でのアイヌ文化、もしくはアイヌ文化は北方的であるということを、周辺の文化と比較することで、アイヌ文化の中にある本質的な人の生き方を浮かび上がらせたい。そのためには、周辺のこと



⑬ 笹の葉で作ったチセ

(旭川郷土博物館)



⑭ 明治初期における北海道「開拓」の様子

(北海道開拓記念館)

をもっと展示する必要がある。先住民族全体の共通理解を示すだけでなく、先住民族の個人の顔を出して、その主張がわかる展示をしていきたい（北海道立北方民族博物館）。

10. アイヌだけではなく、世界中の先住民族が何を考え、何を求めているかということ把握した上で展示をする必要がある。先住民族が「今生きて、今こう生活している」と勝手に展示するというのではなく、先住民族自身が何を知ってもらいたいのかということに先を考える必要がある。しかし、その内容に個人差もあるし、所属グループや地域差や国の差もある。先住民族として政府に認められているかどうかの違いもあるし、その温度差をどうするかは課題である。アイヌに関していえば、グループや世代間の違いが大きい（北海道立北方民族博物館）。

3. 博物館と学校の連携

1. 郷土学習の一環として、近年、地元の子どもたちが博物館に来館するようになった。北海道教育委員会でも人権教育の普及に伴って、公立の学校の子どもたちが来館するようになり、さらにアイヌ民族博物館には、全国から修学生が多数来る（全入館者の約40%）。博物館が、修学旅行や一過性の観光客に与える影響は大きいのが現実であり、伝統文化に重点をおいた博物館の展示がアイヌの人びとに対する誤解を招いていることは否定できない。しかし、これは博物館だけで解決できる問題ではなく、学校、社会全体の問題でもあり、表象の問題は博物館だけの責任に帰するのが疑問である。
2. 来館者の事前の知識によって展示に対する理解度も変わってくる。博物館の展示に関しては、学校でよく学んでいない[スチュアート、上野2001:68～69参照]ので、児童や学生が展示をよく理解できない。北海道の子どもですら、アイヌについて学ぶチャンスは少なく、展示を変更するだけではなく、学校のカリキュラムでアイヌ文化への認識を高める授業などをする必要がある。
3. アイヌ文化の表象に関しては、社会一般に伝える

手段が極端に少なく、博物館に重い責任がかかり過ぎている。博物館にその責務はあるが、博物館だけでは表象の問題が解決されないの、ほかの組織との連携作業が必要だ。

4. 北海道の博物館の多くでは、地元の小・中・高校生の学習に力を入れているが、アイヌ民族の展示よりも和人の歴史や「開拓」に重点がおかれていることは、学芸員の話、そして私たちの観察によって明らかである。

4. そのほかの問題点

1. 和人が持っているアイヌ民族に対する先入観を展示だけでなくすることは難しいが、ほかのアイヌ関係の博物館との交流を増やし、「現在」に関する展示についていっしょに考えて現代の展示をしたい。
2. 文化財保存を目的としている博物館では、アイヌ民族の様子を展示するよりも、文化財を整理し保存・保管して、研究目的のために提供することが役割である。限られた予算と人員で文化財を維持すること自体が困難であり、とくに希少価値のある文化財を維持することで手一杯である。
3. 北海道ウタリ協会の意向がまともれば、博物館でアイヌ民族の「現在」についての展示がしやすくなる。反対に、協会の意向がまともらなければ、博物館の独断で展示をすることは困難である。
4. ほかの展示とのバランスも考えなくてはならない。
5. 展示には映像が足りないが、アイヌ自らのメディアや現在を語るものがない。
6. 北海道のアイヌは農業、漁師、土建業などの仕事に従事している人が多く、観光地で働いているアイヌは一部なのに、観光地で伝統的な姿をしたアイヌ像が主流社会のイメージを決定する問題がある。
7. 「歴史博物館」と銘打った博物館では、「現在」の展示はなじまない側面がある。

紙幅の関係で調査によって得たすべての情報をここで提示することができないが、以上は、私たちが訪れ

た博物館関係者から得た情報の主な点をまとめたものである。要約すれば、それぞれの博物館において次の点が共通している。

1. ほとんど例外なく、アイヌ民族の「現在」を展示する意志はあるが、この課題についてアイヌ自身の意向が明確ではなく、博物館側の一存で展示を設けることができない。
2. 地域博物館では、地元のアイヌとの協議で現状の展示が可能な場合でも、予算と人員の制約の下で実現できないでいる。
3. 博物館同士のネットワークが整備されておらず、各々の博物館が孤立した状況にあり、アイヌ民族に関する展示の内容と方法を模索しているのが現状である。

Ⅵ. 考 察

1. 現状に関する情報がないことについての課題

博物館、とりわけ国公立博物館では、アイヌの「伝統」的な様子を中心とした展示が多いという課題として、来館者はアイヌの近世・近代の展示を観て、今でも展示にあるような生活をしていると誤解する可能性がある。たとえば、踊りや歌の伝統芸能を演出する博物館で、来館者から「出演者は夜に山へ帰る?」「日本語も話せる?」という質問は一度ならずあるという。学芸員のインタビューから、似たような質問はほかの博物館でもあることがわかった。また、伝統の衣装をまとっている登場者が日常的にそのような衣装を身につけていないと言うと、観客の中から「えー」という声がかかるのを目撃したことが印象的であった。

あるいは、昔はアイヌがいたが、今はいるかどうかわからないという誤解を「伝統文化」の展示が招いている。しかし、ほとんどの学芸員が指摘する通り、近代前半以前の様子を多く盛りこんでいる社会科の教科書[スチュアート、百瀬1996; スチュアート、上野2001]のイメージをそのままもっている来館者が多い。現代に関する情報が少ないことの責任を博物館だけに負わせることはできないが、博物館の展示がイメージ

形成に深くかかわっていることが明白である。

2. 現状を展示する陥穽

アイヌ民族がおかれている現状を展示すれば、上述の課題は解決されるだろうと、以前は私たちも考えていた。しかし、調査が進むにつれ、問題は単純に解決のできるものではない、という事情が明らかになった。

第一に、すべての博物館の関係者・担当者は、現状が展示されていない、あるいは展示できないでいる現実に対して一様に困っており、少なからず戸惑いと悩みを感じているが、改善しようと思っても、いくつかの障害がある。

第二に、国公立博物館の場合、行政側がアイヌ民族をめぐる先住性の議論に対して過敏になり、触らぬ神に祟りなしという姿勢が見え隠れしている。アイヌの現状を展示する場合は、先住民族(先住民運動)問題を避けることが困難であろう。というのは、アイヌ民族自身が先住民族だとして政府に認めさせようとしているし、国際的にはアイヌ民族が先住民族と位置づけられているからである。

しかし、これでは私立博物館の展示構想が国公立博物館のそれと大差のないことが説明されないので、ほかに現状展示が実現していない要因があると考えるべきである。つまり、アイヌ民族の現状が積極的に展示されない背景には、次の二重矛盾がある。矛盾の一つは、いわゆる伝統的な様子を展示すると、和人との違いが浮き彫りにされ、民族の独自性が明示される。しかしその一方で、アイヌは今も展示にあるように、床のない茅葺き家に住み、採集狩猟経済を営んでいるという印象を来館者、とりわけ低学年の生徒に与えかねない。もっとも懸念されることは、そのような生活をしてきた人たちがかつていたが、今はいない、あるいは民族として実態をもたない「アイヌ系日本人」になってしまい、その先住性が隠蔽される、という印象である。

反面、現状を強調する展示では、アイヌが直面しているさまざまな社会、経済問題を前面に出せる一方で、



⑮伝統的な服装をする解説員
(アイヌ民族博物館)



⑯交易品シントコ(行器)をチセに宝物として置く
(国立民族学博物館)



⑰シベリア先住民のヘリコプターによるトナカイ放牧
(国立民族学博物館)



⑱シベリア先住民の近代農業の様子
(国立民族学博物館)

和人とは変わらないではないかとする主流社会側^{ドミナント}の感情によって、民族権利運動の勢いが殺がれることを念頭におかなければならない。そうした事情のためか、亡き萱野茂さんの指導の下で構成されている国立民族学博物館のアイヌ民族の展示でも、内容は「伝統」に限定されているのではないかと想像される。というのは、アイヌ民族展示に隣接する中央・北アジアの先住民族の展示に、いわゆる伝統的な資料のほかに、壁にはトラクターで畑を耕す様子、ヘリを使うトナカイ放牧、キツネ養殖、モーターボートを使ったマス漁、都市の街並みの写真がある。この展示では、伝統的な様子と、現代の様子がよくわかるようになっている。

アイヌ民族の展示と、中央・北アジアの展示の違いを評価するのはなく、国によって先住民族がおかれている政治的、社会的な違いを表わしていると理解すべきである。

明言を避ける印象であったが、複数の公立博物館関係者のインタビューでは、民族運動、すなわち先住民運動を表に出すのがはばかれることをうかがわせる話しがあった。それは、日本政府のアイヌ民族に対する姿勢に関係している、という印象を受けた。

日本政府の正式見解（1999年）は、次の通りになっている。

「(アイヌの人びとの問題については、) これらの人びとは、独自の宗教及び言語を保存し、独自の文化を保持していると認められる一方において、憲法の下で平等を保障された国民としてその権利の享有を否定されていない」(国連人権委員会第3回報告の概要1991年12月)。

この見解と相まって、中曽根総理大臣(当時)にはじまり、最近までくり返されている政治家の発言に代表される単一民族国家思想が国民一般に浸透していることが、先住民運動を積極的に展示することに無言の圧力をかけているのが想像に難くないことである。北海道にあるいくつかの博物館において、アイヌ民族の現状、そして先住民運動に関する展示は和人側の感情にそぐわないと考える関係者がいる。

なんらの公的制約を受けない私立博物館でも、アイ

ヌ民族の現状に関する情報がほぼ完全に欠落している一側面には、民族の独自性と独自の歴史を強調することが選択されているのではないと思われる。ただし、これについては、アイヌが運営する私立博物館でも明解な答えが得られなかった。

上述の問題はアイヌ民族側にあるのではなく、アイヌ民族を取りまく「日本」の情勢にあることは指摘するまでもないことだろう。

ところが、上述の事情に加えて、博物館の展示に関してアイヌ民族の内部にも問題があることを指摘できる。それは、展示する場合、どの地域の様子を規準にするのか、つまり、アイヌ民族を代表するのにどの地域のアイヌ文化を登場させるかという問題である。地域博物館では、その地域の文化を展示すればよいのだが、北海道開拓記念館などの総合博物館や、本州にあり、アイヌに関する予備知識のほとんどない来館者が多い博物館では、その地域性の問題が展示担当者を悩ませる問題になっているそうである。展示物の説明パネルに使うアイヌ語表記、つまりどの地方の「方言」を使うかにも同じ悩みがある。

この問題は、どこの国の少数・先住民族にもつきまとう問題であるが、多くの外国では、主流社会側とのせめぎ合いで展示の「標準化」を可能にする妥協が見出されている。こうした妥協、つまり外に発信する民族情報をどのように「標準化」するのか、今後、アイヌ民族に課せられている課題だといえよう。先住民がおかれている政治的、法的、社会的状況が大きく異なる外国の事例をそのまま日本に当てはめることは現に慎重しなければならないが、参考資料として、外国博物館の調整成果を簡単に紹介する。

カナダでは先住民の伝統、歴史と現状がわかる展示になっている。先住民の歴史の一環として、イギリスとフランスの植民地的な支配が諸民族に及ぼしたネガティブな影響を隠さず表現している。植民地支配による圧政、征討、強制同化などの展示は謝罪と贖罪的な意識、そして先住民との新しい関係を築くために展示を通じた来館者に対する啓発的な意図が込められていることが、展示の観察による印象と学芸員の説明によ



⑲アイヌ文化振興法ではアイヌは先住民として認められていない
(大阪人権博物館)



⑳乱獲されたバイソンの頭骨の山
(アルバータ州立博物館)



㉑アルバータ州の先住民の普段着姿とメッセージ
(アルバータ州立博物館)

って裏づけられた。とくに、先住民が現在も健在であり、伝統を継承しながらも近代国民国家に吸収合併された状況に対応して、独自のアイデンティティを保持しながらも今日的な生活をしていることに関連する展示が心がけられている。

文明博物館の学芸員が当事者の先住民と協議して、先住民の歴史と現状に対するステレオタイプを排除するための原則に基づく展示綱領が採択された。その綱領に沿った先住民の新しい展示は、先住民の歴史の変遷、ヨーロッパ人の侵入とその影響、不平等条約、強制移住や指定居住地の様子などを示し、さらに先住民の現状と直面している課題に焦点を当てている。この原則では、都市在住者を含めてカナダのすべての先住民（First Peoples）に関して、その歴史、伝統と現状が肯定的に確認される（be affirmed）とともに、ステレオタイプを排除して、連邦・州・準州政府との特異な関係、すなわち先住民として認められている特別な法的地位を表象する展示を行なう姿勢がうたわれている。

アルバータ州立博物館では、植民地的な支配に関する展示は全寮制学校のほかに、先住民の食料源を断つために行なわれた入植者による1880年代の大量バイソン（野牛）狩りの様子のもと、現在の先住民とそのメ

ッセージが展示されている。

上述の「そのほかの問題の5.」では、「展示には映像が足りないが、アイヌ自らのメディアや現在を語るものがない」に関することであるが、カナダでは国立映画機関（National Film Board：NFB）が進めている、民族の現状を記録する画期的な企画を紹介しておく。先住民の若者数名に小型ビデオカメラを与え、専門家による1週間の操作指導と編集教習の後、若者が自らの民族がかかえる問題や現在の生活をテーマにドキュメンタリーを作る。編集されたこうしたドキュメンタリーはNFBによって製品化され販売されているので、カナダの先住民に関する現状を表わすメディアは豊富であり、誰でも容易に入手できるのみならず、先住民の問題意識を高める効果もある。

VII. まとめ

本論は、博物館におけるアイヌ民族の展示はどうあるべきかという視点ではなく、今後、アイヌ自身と博物館関係者が「現在」の展示を考えるに当たっての資料を提供するためにまとめたものである。

北海道と本州の博物館を調査したことを通じて、どこもアイヌ民族の現状に対して真正面から取り組んでいないことを強く感じた。取り組んでいない背景には、アイヌ自身がかかえている矛盾、すなわち表面的に和人と変わらない様子を展示することは、民族としての独自性を表わせないので、先住民としての地位を確立させることを困難にするという矛盾があることがわかる。

また、博物館関係者は現状を展示したいという意向があっても、上記の問題があるので、どのように展示すればよいかと戸惑っている。戸惑いの背後には現状の提示に対して、アイヌ民族の代表団体である北海道ウタリ協会や関東ウタリ会などの意向が表明されていないことがある。さらに、わかりやすい展示にするために、アイヌ文化を「標準化」する必要がある一方、北海道各地のアイヌ文化の多様性のほかに、東京や大阪に在住するアイヌ民族の現状は北海道のそれとは異



②現代アイヌの先住民活動ポスター
(大阪人権博物館)

なっていることがある。

本調査を通じて感じたもう一つの印象は、展示の説明パネルに現状に関する情報はあが、多くの博物館関係者のインタビューから、そして私たちの観察より、一部の来館者以外は文字情報にあまり注意を向けていないようであることがわかった。そのため、せっかくの情報がほとんど伝わらないので、そのための工夫が必要だと感じた。その上、姿形が和人と変わらないアイヌの民族アイデンティティという抽象的な事柄をどうやって表象するか、という問題が解決されていない。

最後に、以上の問題解決に向けて、次の2点を挙げる。

1. アイヌ民族の展示に関して、各地の博物館の関係者・担当者の間には横のネットワークが整備されていないので、ネットワーク整備に対応する必要がある。一つの博物館だけで、とくに地方の小規模博物館で展示の構想と方法を独自に講じることは困難である。アイヌ民族の代表と博物館関係者が一堂に集まり、意見と情報を交換するワークショップでネットワークを作る。
2. 博物館の管理運営に指定管理者制度の導入に伴う、アイヌ文化の専門家の地位保全という課題に対応する必要性。

謝辞

多くの博物館の館長および学芸員（キュレーター）が貴重な時間を割いて私たちの調査にご協力いただいたことに厚くお礼を申し上げます。

引用文献

- クリフォード、ジェイムズ（毛利嘉孝ほか訳）
2002『ルーツ—20世紀後期の旅と翻訳』月曜社
鈴木二郎
1990「東京在住アイヌの問いかけ：実態調査を終えて」

- 『ヒューマン』31：68-81、部落解放研究所
スチュアートヘンリ
1991「シャクシャインの〈乱〉と民族自決」『静内シンポジウム「シャクシャイン3・2・1」収録』pp.25-45、静内シンポジウム実行委員会
2002「先住権と権原」『文化人類学最新述語100』pp.104-105、弘文堂
2003「野性から未開へ：19世紀以降の未開観念」『「野生」の誕生：未開イメージの歴史』（スチュアートヘンリ編）pp.241-263、世界思想社
2006「アメリカ先住民の宗教」『宗教の事典』（市川裕ほか編）朝倉書店
スチュアートヘンリ編
2003『「野生」の誕生：未開イメージの歴史』世界思想社
スチュアートヘンリ；上野華香
2001「先住民をめぐる社会科教科書の記述：日本とカナダの比較研究」『他者像としてのアイヌイメージを検証する：文化人類学におけるアイヌ民族研究の新潮流』（スチュアートヘンリ編）際文化研究所紀要6:63-72、昭和女子大学
スチュアートヘンリ；百瀬 響
1996「社会科教科書のアイヌに関する記述」『中学・高校教育と文化人類学』（青柳真智子編）pp.41-78、大明堂
東京都企画審議室
1989『東京在住ウタリ実態調査報告書』東京都企画審議室
ハーバー、ケン（鈴木主税；小田切勝子 訳）
2001『父さんのからだを返して：父親の骨角標本にされたエスキモーの少年』早川書房
ホーン、D.（遠藤利国 訳）
1990『博物館のレトリック：歴史の〈再現〉』リプロボート
北海道民生部
1986『北海道ウタリ生活実態調査報告書：調査の結果』北海道民生部
吉田憲司
1996「〈異文化〉の展示の系譜：もう一つの人類学史・素描」『思想化される周辺世界』（岩波講座 文化人類学12）pp.33-68、岩波書店
1998「民族誌展示の現在：表象の詩学と政治学」『民族学研究』62-4：518-536、日本民族学会
Ames, Michael
1992 *Cannibal Tours and Glass Boxes : The Anthropology of Museums, Vancouver* : UBC Press
Asquith, P. J.
2000 Japanese Scholarship and International Academic Discourse, *Ritsumeikan Journal of Asia Pacific Studies* 6 : 39-44, Ritsumeikan Daigaku
Carbonell, Bettina (Ed.)
2004 *Museum Studies : An Anthology of Contexts*, London : Blackwell
Goddard, John
1991 *Last stand of the Lubicon Cree*, Toronto : Douglas & McIntyre
Grad, Rachael
2003 Indigenous Rights and Intellectual Property Law: A Comparison of the United States and Australia, *Duke Journal of Comparative & International Law* 13-1 : 203-222

- Harrison, Julia
1988 "The Spirit Sings" and the Future of Anthropology, *Anthropology Today* 4-6 : 6-9, Royal Anthropological Institute
- Hiller, Susan (Ed.)
1991 *The Myth of Primitivism ; Perspectives on Art*, London: Routledge
- Jones, Anna
1993 Exploding Canons : The Anthropology of Museums, *Annual Review of Anthropology* 22 : 201-220, Palo Alto : Annual Reviews Inc.
- Karp, Ivan ; Steven Lavine (Eds.)
1991 *Exhibiting Cultures : The Poetics and Politics of Museum Display*, Washington D.C.: Smithsonian Institution Press
- Kingston, Sean
2003 Anthropology and the British Museum : A Conversation with John Mack, *Anthropology Today* 19-6 : 13-17, Royal Anthropological Institute
- Lane, Paul
1996 Breaking the Mould? Exhibiting Khoisan in Southern Africa Museums, *Anthropology Today* 12-5 : 3-10, Royal Anthropological Institute
- Ohtsuka, Kazuyoshi
1996 Exhibiting Ainu Culture at Minpaku : A Reply to Sandra A. Niessen, *Museum Anthropology* 20-3 : 108-119, American Anthropological Association
- Niessen, Sandra
1994 The Ainu in Mimpaku : A Representation of Japan's Indigenous People at the National Museum of Ethnology, *Museum Anthropology* 18-3 : 18-25, American Anthropological Association
1996 Representing the Ainu Reconsidered, *Museum Anthropology* 20-3 : 132-144, American Anthropological Association
- Shimizu, Akitoshi
1996 Cooperation, Not Domination : A Rejoinder to Niessen on the Ainu Exhibition at Minpaku, *Museum Anthropology* 20-3 : 120-131, American Anthropological Association
- Simpson, Moira
1996 *Making Representations : Museums in the Post-colonial Period*, London : Routledge
- Schrire, Carmel
1996 Native Views of Western Eyes, *Miscast : Negotiating the Presence of the Bushman*, in Skotnes 1996 : 343-354, Cape Town : University of Cape Town Press
- Skotnes, Pippa (Ed.)
1996 *Miscast : Negotiating the Presence of the Bushman*, Cape Town : University of Cape Town Press
- 資料 1 : 調査した国内博物館**
北海道大学総合博物館 (札幌市)
北海道大学植物園内博物館 (札幌市)
北海道開拓記念館 (札幌市)
北海道ウタリ協会資料館 (札幌市)
函館市北方民族資料館 (函館市)
アイヌ民族博物館 (白老町)
沙流川歴史館 (平取町二風谷)
萱野茂二風谷アイヌ資料館 (平取町二風谷)
平取町立二風谷アイヌ文化博物館 (平取町二風谷)
北海道立北方民族博物館 (網走市)
網走市立郷土博物館 (網走市)
川村カ子トアイヌ記念館 (旭川市)
旭川郷土博物館 (旭川市)
帯広100年記念館 (帯広市)
幕別蝦夷文化考古館 (幕別市)
苫小牧市博物館 (苫小牧市)
芹沢銈介美術工芸館 (東北福祉大学内、仙台市)
青森県立郷土館 (青森市)
野外民族博物館リトルワールド (名古屋市)
国立民族学博物館 (吹田市)
大阪人権博物館 (大阪市)
- 注**
1) 先住権 : 先住権は、国民一般の権利 (公民権) に加えて、先住民のみが享受する権利であり、先住民が狩猟や漁労などの生業活動や民族法に基づく自治などの伝統的活動を行なう権利である [スチュアート2002]。

(平成18年11月 7 日受理)